

連載小説「女装強要妄想ノート」

2. ホワイトデーにメイド服でチョコを作らされる

3月14日、ホワイトデー当日。

バレンタインに妹の亜弓からチョコをもらっていた真弓は、昼過ぎに彼女の部屋に出向いてお返しのチョコレートを渡そうとして、

「え、いない」

思いがけない返事に、目を丸くする。

「い、いないってどういうことだよ!？」

「市販のチョコとかお返しにもらっても一、感謝の気持ちとか感じられないじゃん？」

「お前が渡したのだって市販だったくせに。しかも小分けの……」

「とにかく」

亜弓は語気を強め、ベッドから起き上がると、兄を見てニヤリと笑う。

「あたしは兄ちゃんの——ううん、真弓ちゃんの手作りチョコが食べたいな」

「ま、真弓ちゃん……？」

嫌な予感に、真弓は背筋を寒くする。

もちろん今は女装していない。シャツとズボン、パーカーというルームウェア姿で、髪もいつものように後ろで結んでいるだけだ。

——雛祭りの日から、10日余りが過ぎていた。

あれ以来、真弓は特に女装を命じられていなかった。てっきり毎日でも女装させられるものと覚悟——あるいは期待していた真弓にとって、拍子抜けもいいところだ。もはや雛祭りの出来事自体が悪い夢か何かのような、今まで通りの日々だったが、ただリビングのマガジンラックに置かれたままのノートと、彼の部屋のウォークインクローゼットにかかっている女兒服だけが、現実である証拠として残っている。

もちろん自分から女装するような度胸も勇気もなく、けっきょくずっと女装せずに過ごしていたのだが——

（そういえばホワイトデー関係の妄想も、あのノートには書いてたような……たくさんありすぎてよく覚えてないけど、亜弓はまさか、あの中から……？）

例のノートの存在を思い出し、ある可能性が一気に膨らんでくる。すなわち、

「そ、それって、つまり……オレに、女装しろって、こと……？」

「あははっ、察しのいいお兄ちゃんは嫌いじゃないわ。それとも、そんなに声を震わせてるなんて、実はずっとさせられるの待ってたのかな？」

「ちっ、ちがっ……！ これは、恥ずかしいからで……！」

「ほんとかなー？ お姉ちゃんとしては、真弓ちゃんが好きそうな衣装を用意したんだから、喜んでもらえると嬉しいんだけどなー」

「お、オレが好きそうな衣装……？」

嫌な予感が加速する。同時に、期待と興奮も胸の中で膨らんで、

「嬉しそうな顔しちゃって。というわけで、はいこれ」

亜弓はくすくす笑いながら、掛布団の下に隠していたものを取り出すと、それを兄に向けて投げてよこした。

反射的に受け取ってしまった真弓は、それを見て目を丸くする。

白と黒のモノトーン。たつぷりとフリルがついたエプロンと、レース付きのカチューシャがセットになったそのコスチュームは――

「こ、これって――メイド服……？」

「あたりー！ 定番でしょ？」

「た、確かに、女装コスプレだと、制服と並んで定番だけど……でも、なんで……」

「あれ？ ノートに書いてあったんだけど、覚えてないんだ？ ほとんどノート一冊使い切るくらい書いてあって、しかもホワイトデーがらみもたくさんあったもんね。覚えてなくても仕方ないか」

「うぐっ……あ、亜弓、もしかしてあれぜんぶ読んだのか……？」

「もちろん。兄ちゃんの妄想、楽しく読ませてもらったよ。で、その中のひとつに、『ホワイトデーにメイド服を着せられて、チョコを手作りするように言われる』ってのもあってよね？」

「あっ……うん……じゃあ、これは――」

「うん、そういうこと」

亜弓はにんまり笑って立ち上がると、真弓に向かって高らかに命じた。

「というわけで、真弓ちゃん。そのメイド服を着て、手作りチョコ、用意してちょうだいね」

「姉」にそう言われて、断れる真弓ではなく、

「は、はい……」

従順な「妹」として受け取って、自分の部屋に戻って着替え始めた。

まずは部屋着を脱ぎ、下着も脱いで裸になると、クローゼットの引き出しから、10日以上封印されたままだった女兒用下着を取り出す。フロントにピンクのリボンがついたインゴムショーツを穿いて、キャミソールを着ると、早くも胸が痛いほどに高鳴ってきた。

「ううっ、下着だけでもこんな恥ずかしいのに、メイド服で、しかもチョコを作れだなんて、真弓のやつ、横暴すぎる……」

ぼやきつつも、メイド服をパッケージから取り出す。

黒の丸襟ノースリーブワンピースに、白いヘッドレス風カチューシャと、二の腕まで隠れるグローブ、前掛けのみのエプロン、白黒ボーダーのニーソックス。モノトーンではあるが、ワンピースの襟や前立ての左右、エプロンの縁にフリルがあしらわれているため、なかなか可愛らしいデザインとなっている。サイズはSなので、140センチちょとの真弓でも問題なく着られそうだ。

改めてベッドの上に並べて眺めると、緊張がこみあげてくる。

「いまからこれを、オレが、着る——」

緊張に喉を鳴らし、まずワンピースから取り掛かる。

ボタンを外して足を通し、袖を通してボタンを留めなおすと、

「量販店の安いコスプレって感じで、これはこれで、恥ずかしいっ……！」

前回の女兒服に比べると、作りはよくない。生地はざらざらしているし、縫製も甘いところが目立つ。だからこそ、触れた部分をくすぐられているような肌触りの悪さが、少年の心を辱めた。

続いて、少し悩んだのちニーソックスを履く。こちらは比較的柔らかく、普通の穿き心地だ。さらにグローブをはめると、肌が露出しているのは首から上と、肩、太もものみとなるが——逆に出ているその部分が、気になって仕方がない。特に「絶対領域」は、ニーソックスのしめつけとスカートのざらつきのコンビだ。

ヘッドレス風のカチューシャを頭につけ、エプロンのリボンを腰の後ろで結んでいた真弓だったが、

「そういえば、この格好でチョコレートを作れって言われたけど……まさか、材料から買って来いなんて言わないよな……？」

ふとした想像に、赤みがさしていた顔から血の気が引く。

今までずっと女装させられる妄想をしてきた真弓であったが、実際にしたのは雛祭りの日が初めてで、その一回だけ。ここでいきなり、メイド服のまま製菓材料を買って来るとなると、たくさんの人に女装した姿を見られることに——

「うう、その時は、せめて着替えさせてもらわないと……」

ともあれ、メイド服は着終えた——となれば、

「や、やっぱり、身だしなみをチェックしないと、ダメだよな……」

言い訳するようにつぶやいて、部屋の隅に目をやる。

モノトーンを基調にした男子の部屋にあってやや異質な、優美なレリーフに縁どられた楕円形の姿見。いささか少女趣味似すぎるそれは、前回の女装の後、「着た時に自分で見たいでしょ」と母親にプレゼントされていたものだ。

「いままで一度も使ってなかったけど、まさかこんなすぐに、使うことになるなんて……」

バクバクと高鳴る心臓を押さえるように胸に手を当てて、大きく息を吸い込んで——真弓は清水の舞台から飛び込むように、鏡の前へと足を踏み出した。

覗き込んだ鏡面に映り込んだのは、メイド服を着た自分の姿。とうぜん胸はないが、それ以外は問題なく美少女メイドだ。とても男子高校生には見えない。

「はあ、何で似合っちゃうんだよ……これで似合わなかったら、逆に女装させられることなんてなかっただろうに……」

後ろで結んでいた髪もほどいて、背中全体に下ろす。艶やかな黒髪が大きく広がって、
「ほんとに、女の子みたい——っていうか、メイド服が安っぽいせいで、なんだかいかかわしい感じにも見えてくる……」

仮装としてのコスプレではなく、性行為におけるプレイとしてのコスチュームプレイを想起して、真弓が頬を朱に染めていると、

「あははっ、兄ちゃん、鏡に見とれてどうしたの？ 自分の可愛さに惚れちゃった？」

「あ、亜弓、いつの間に……！」

音もなくドアを開けて潜入していた妹に、真弓はいつそう赤くなる。

「へえ、思ったとおり、似合ってるじゃん。くすくすっ、あたしが着るよりよっぽど女の子らしいんじゃないの？」

「それは……うん……」

「ちょっと、そこは否定してよ。……ま、いいわ。それじゃ早速、チョコづくりを始めてちょうだいね。メイドの真弓ちゃん♪」

「チョコづくりって、まさか材料からこの格好で買って来いなんて言わないよな？」

「んー？ その言い方、なーんか期待してるように聞こえるんだけど？」

「そ、そんなこと……！」

意地悪く笑ってのぞき込む妹に、真弓の背筋を寒いものが伝った。

3. チョコづくり～マッサージで奉仕

「なーんて、ね。ちゃんと、材料も器具も用意してあるわ」

「ほっ……もう、脅かすなよ……」

「くすくすっ、ほんとはちょっと、期待してたくせに。ほんとはそうしてあげてもよかったんだけど、最初はじっくりとってママにも言われてるからね。今回は、外出はなし」

「それってつまり、じっくりいたぶってるってことじゃないか……」

ぼやく真弓だったが、本当にこの格好で材料から買って来いと言われるよりはマシだ。

「材料はキッチンにママが用意してくれてると思うから、行ってらっしゃーい」

「はいはい」

軽く返事をして部屋を出ようとする真弓だったが、

「ちょっと、真弓ちゃん。メイドさんなんだから、お嬢様に対してその口の利き方はいかがなものかしら？」

「うっ……なにも、そこまでしなくても……」

「……………」

「か、かしこまりました、お嬢様。チョコレートを、ご用意差し上げます」

「よろしい。それじゃ、お願いね。私の可愛いメイドちゃん」

楽しそうな「お嬢様」の声に送り出される真弓であった。

＊

リビングに降りてゆくと、母親は驚いた様子もなくメイド服姿の息子を出迎えた。

「ふふっ、すっかり可愛らしいメイドさんになっちゃったわね」

「これはその、亜弓に言われて、仕方なく……」

メイド服の裾を押さえて、言い訳がましく言う真弓。そのしぐさが余計に女の子っぽくなっている自覚はあり、いっそう胸がくすぐられたが、それでも短いスカートが気になって仕方がないのだ。

「それだけじゃないでしょ？ 亜弓はお兄ちゃんの願いを叶えてくれてるんだから、ありがたく思わないと」

「うっ……」

痛いところを突かれて、真弓は視線を逸らす——と、その先にあるマガジンラックに、ソーイング雑誌や料理雑誌、教育学の雑誌と並んで置かれたキャンパスノートを見つけ、ますますいたたまれない思いをしてしまう。

あれこそが、いまメイド女装させられている元凶の「女装妄想ノート」である。彼が数年かけて書き込んだ「こんな風に女装させられたい」という妄想が家族にバレたせいで、先週

は雛祭りの日に女兒服を着せられ、今またこうして、メイド服を着せられているのだった。
つまりは自業自得である。

「それより、チョコの材料は——」

「ええ。必要な材料と器具はそろえてあるし、作り方もママが教えてあげるから、安心して。
溶かして金型で冷やしなおすだけだから」

「ならいいんだけど——ちなみに、金型は？」

確認したのは、ふと嫌な予感がしたからだ。亜弓の性格を考えると、金型は——

「ふふっ、もちろんハート形よ。『お姉ちゃん』への本命チョコね」

「ああ、やっぱり……！」

チョコレートづくりそのものは、それほど難しくない。刻んだチョコレートを湯煎で溶かし、絞り器をつかって金型に入れ、冷やして固める——必要なのは丁寧な温度管理くらいのものだ。

しかし、「妹のためにメイド服を着てチョコを作っている」というシチュエーションそのものに、真弓はドキドキしっぱなしである。ちょっと動くだけでもスカートが揺れて落ち着かないのに加え、カメラを持ち出した母親が、真弓の作業風景を写真に収めてゆく。

「お姉ちゃんのためにチョコレートをやる真弓ちゃん、可愛いわよ」

こんな恥ずかしい姿を残されたくはないが、さりとて作業の手を止めるわけにはいかず、真弓はチョコづくりに専念して——

一時間後、真弓は完成したチョコを載せたお皿を持って、妹の部屋のドアをノックした。

「お、お待たせしました、お嬢様」

「くすくすっ、どうぞ入ってちょうだい、真弓ちゃん」

「し、失礼します」

ドアを開けて入ると、そこには亜弓の姿——なのだが、

「亜弓が、ドレス着てる……」

「可愛いメイドさんにお嬢様って呼んでもらってるんだもの、たまにはこういうのも、悪くないかなって思っただけ」

そふぁにゆったりと腰掛ける亜弓が着ていたのは、ワインレッドのワンピースであった。金髪縦ロールのウィッグまでかぶっていて、ややきつめの顔立ちもあり今にも高笑いしそうなその様子は、

「お嬢様はお嬢様でも、悪役令嬢っぽいな……」

「ちょっと、真弓ちゃん。聞こえているわよ？」

亜弓は唇を尖らせるが、ふとその目が、真弓のスカートの前に向いて、

「あら、真弓ちゃん——どうしてそこが、膨らんでいるのかしら？」

「これはっ……！」

真弓は慌てて、片手でスカートの前を隠す。

今までのようにただ恥ずかしいだけとは違う危機感に、全身から嫌な汗が噴き出すような感覚に襲われる。

妹はくすくすと——外見通りの悪役令嬢のように笑いつつ、長い脚を振り上げるようにして組んだ。

「いけないわね、真弓ちゃん。わたくしに仕えるメイドでありながら——もしかして、淫らな気持ちになってしまっていたのかしら？」

「そ、そんなことは……！」

「なら、証立ててもらわないとね。チョコをそのテーブルにおいて、スカートをめくって、下着を見せてごらんなさい」

「スカートを……！？」

今までのような女装でのごっこ遊びでは済まない流れに、真弓は青ざめる。

亜弓も小学6年生——来月には中学生である。兄の体に起きている事態について、まるきり無知とは思えない。兄としては、毅然とした態度で断るべき場面だ。

しかし——

「さあ、早くなさい。わたくしの命令よ、真弓ちゃん」

「は、はい……かしこまりました、お嬢様……」

メイドとお嬢様——そんなロールプレイが、兄としての立場を圧倒してしまう。

妹の前のテーブルにチョコレートの皿を置いて、自分のスカートを、震える指でつまむ。

(何してるんだ、オレは……)

(妹に命令されて、スカートをめくるなんて……そんなことをしたら……！)

ゆっくりと、垂れ幕が上がるようにして絶対領域が広がり、真っ白な太ももが露わになってゆく。そしてついには、太ももの間にさらに真っ白な逆三角形が覗いて——

「くすっ、くすくすくすくすっ……」

自らが与えた、おさがりの女兒用ショーツ。それを着用した兄の下半身の、少女には決して存在しない膨らみが立ち上がっているのを発見して、亜弓はこらえきれぬように忍び笑いを漏らした。

「あらあら、いけないわ、真弓ちゃん。せっかくかわいいメイド服を着てるのに、スカートの中でそんなに男の子の場所を膨らませているなんて、お行儀が悪いわよ」

「うっ……も、申し訳ありません、お嬢様……！」

こみあげる恥ずかしさと情けなさを、メイドとしてのロールプレイに徹することで糊塗する真弓。それが悪手であると判っていながらも、逃げることも、逆らうことも許されない絶対的な「お嬢様」の威厳の前には、従わざるを得ない。

亜弓は「メイド」の答えに満足げに目を細め、

「もうちょっとこっちにいらっしやい、真弓ちゃん。もうちょっと——そう」

命じられるがまま、真弓はスカートをめくりあげた状態で、手を伸ばせば届きそうなほどの距離に近づく。

（見られてる、見られてるっ……！）

視線そのものが物理的な作用を持っているかのように、露わになったショーツのふくらみを撫でられ、つつかれている錯覚があった。内側のモノはいっそうビクビクと痙攣し、今すぐにでも手で押さえたくなるのを必死でこらえあなければならなかった。

「正直に答えなさい。真弓ちゃんはメイド服を着て、淫らな気分になっているのよね？」

「は、はい……そのとおりです……」

「ふうん……もしかしてあのノートも、そういうことだったのかしら？」

「っ……！ は、はい……！」

もはや隠すことはできないと、真弓は唇を噛んで認めた。

「女装妄想ノート」。あれは単に女装させられるシチュエーションを書き留めて楽しんでいるだけではなく、彼自身が自慰行為をするときのオカズでもあったのだ。

——そもそも、男子高校生としては異例なほど小柄で女顔な彼が、これまで周囲から女装を勧められたり、求められなかったわけがない。

にもかかわらず、16年間そうした要求をはねのけ、頑なに女装を拒んできた理由のひとつは、女装したら昂奮して勃起してしまうからであった。

体格や外見通り、彼の男性器は包茎短小で、勃起してもそれほど目立つ大きさではない。しかしそれでも、女装で勃起しているのが見つかったら変態と蔑まれることは免れない。

そう——ちょうど、今のうちに。

「あらあら、真弓ちゃんが女装して昂奮するような変態だったなんて、がっかりですわ。本当はわたくしのお兄様、男子高校生でありながら、メイド服を着て妹にご奉仕するというシチュエーションに、淫らがましい心を起こすだなんて」

さも嘆かわしいとばかりに金髪縦ロールのウィッグをかぶった頭を振り、芝居がかった口調で言う亜弓。

真弓が何も言い返せずにいると、彼女はニヤリと笑って、組んだ脚の上になっているほうを持ち上げると、

「そんな変態メイドの真弓ちゃんには——おしおきが、必要ですわね？」

その爪先を伸ばして、兄のショーツのふくらみに触れた。

「ひっ……！？ お、お嬢様、なにを……！」

「そのままにしてなさい。後ろに下がったり、スカートを下ろしたりするんじゃないわよ」

「うっ……は、はい……」

「へえ、意外とちゃんと硬いのね。大きさは、教科書で見たのよりずいぶん小さそうだけど」

「……………」

おそらく保健の教科書との比較だろうが、実の妹に「小さい」と言われていささかならず傷つく真弓。

しかしそんなデリケートな心とは裏腹に、ショーツの上から妹の爪先に押さえつけられた少年の証は、さらに劣情を猛らせてしまう。

「お、お願いします、お嬢様、もう、お戯れ、はっ……！」

「戯れじゃなくてお仕置きよ、真弓ちゃん。エッチなメイドをしつけるのも、お嬢様の役目だもの。ほら、こうされるのがいいいでしょ？」

「ひいっ……！」

妹は爪先で円を描くように、ショーツの上から彼のペニスをこねくり回し始めた。

ソックスの内側で指そのものも動かしているため、まったく予測のつかない変則的な刺激が真弓の怒張を翻弄し、ビクビクと激しく痙攣して、いよいよ最高潮に達する。

「や、やめてください、お嬢様……もう、で、出ちやいそう、ですっ……！」

「ん？ 何が出ちやうのかしら？ はっきり言ってくれないと判らないわね、真弓ちゃん？」

「そ、それは、せ、精液、がっ——！」

答えた瞬間には、しかしもう遅かった。

上向きにされたペニスの裏筋を、亜弓の爪先——親指と人差し指に挟まれようにしごき上げられて、真弓はついに果ててしまっていた。陰囊がギュッと締め付けられると同時に、尿道を駆け抜けた欲望があふれ出して、ショーツの中に吐き出される。

「あっ、ああっ……！」

「あら、あら」

苦しげなよがり声と、全身を痙攣させ、目じりに涙すら浮かべた兄の様子、ショーツに浮かび上がった大きなシミと、かすかに鼻をつく青臭い匂い。

亜弓もすぐに事態を察してくすくす笑い、

「ほんと、ご主人様の足に弄られてイっちゃうなんて、真弓ちゃんったらはしたないんだから」

「う……ご、ごめんなさい……」

「これはみっちりとしつけが必要ね。——でも」

亜弓は脚を組みなおすと、テーブルの上に置かれているチョコレートをひょいとはつまんで口に入れ、

「うん、おいしい。チョコに免じて、許してあげるわ」

「あ、ありがとうございます、ます、お嬢様……」

いまだ興奮冷めやらず、さらに射精後の余韻と賢者タイム特有の慙愧にわななきながら、

真弓は声を震わせて答えた。

「でも、ちゃんとしたメイドさんになれるように頑張ってもらわないとね。罰として、今日いちにちはその格好で、ママの手伝いをしなさい。わかった？」

「は、はい。かしこまりました……」

「それと——さすがに下着も、そのままってわけにはいかないわね。あたしのおさがりをあげるから、好きなものを持って行って履き替えなさい。一番下の段に入ってるから」

「は、はい……」

結局、メイド服は脱げないままか——射精後の冷静な状態でメイド服を着せられ続けることに、先ほどよりいっそう強い羞恥を覚えながらも、真弓は素直に妹のクローゼットに向かうのだった。

＊

その後、真弓はピンクドット柄の下着に置き替えたのち、母親に言われて家の掃除をしたり、洗濯物を畳んだり、料理の手伝いをしたり——さらには亜弓に命じられて、ソファでくつろぎながらテレビを眺める彼女の足を揉んだりさせられた。もちろんその間は、ずっとメイド服だ。

ようやく脱ぐことを許されたのは、夕食が終わってお風呂に入るタイミングであった。

「はあ、疲れた……友達が来る日じゃなかったから、よかったけど……」

湯船につかりながら、真弓はひとりごちる。

女装しているところを友人たちに見られたらと考えるだけでも、身震いが出る。馬鹿にされることはない——むしろ大喜びすることだろうが、

「女装だけならともかく、昂奮してるなんて知られるわけにはいかないからな……」

(でも、ちょっと気持ちよかったかも——)

昼間に妹の足でイってしまったことを思い出し、真弓はまた、余韻に勃ちそうになってしまい、真弓は慌てて頭を振るのだった。

